

第4章 イギリスの教育行政について



ロンドン・リッチモンド区公立中学校の授業風景

イギリス (グレートブリテン及び北アイルランド連合王国)
United Kingdom of Great Britain and Northern Ireland



1. 面積 24.3 万平方キロメートル (日本の約 3 分の 2)
2. 人口 6,097.5 万人 (2007 年)
3. 首都 ロンドン (人口約 751 万人、2007 年)
4. 言語 英語 (ウェールズ語、ゲール語等使用地域あり)
5. 宗教 英国国教等

経済状況

1. 主要産業 航空機、電気機器、エレクトロニクス、化学、金属、石油、ガス、金融
2. 主要貿易品目 (1) 輸出 原油、自動車、医薬品、石油製品
(2) 輸入 自動車、原油、石油製品、自動車部品
主要貿易相手国：米、独、蘭、仏
3. 通貨 スターリング・ポンド
4. 為替レート 1 ポンド=約 143 円 (2009 年 10 月 1 日付)¹⁴

¹⁴外務省 HP <http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/uk/index.html>

イギリスの概要

イギリスの教育は、地域または公立学校か私立学校かによって異なる。例えば、「スコットランドと北アイルランドは独立性が高く、教育改革もそれぞれ独立した法律によってなされている。また、教育制度も異なる面があり、例えばスコットランドでは大学は4年間であるが、イングランドとウェールズは3年間である¹⁵⁾。」よって、その仕組みは複雑であるため、人口の80%以上を占めるイングランドの教育制度を中心に説明する。

イギリスの教育制度

教育制度は上述のとおり細部に入ると複雑な面も有するため、要点のみを説明する。

- 「① 小学校は、5歳からで日本より1年早い。6年生までである。
- ② 中等学校の前半は11歳から15歳(卒業時は16歳)までの5年間のセカンダリー・スクールであり、ここまでが義務教育である。このセカンダリー・スクールは主にグラマー・スクールとコンプリヘンシブ・スクール(総合制中等学校)に分かれる。
- ③ 中等教育の後半の16歳から17歳の2年間はシックス・フォーム(「中学校を卒業後、主に大学進学を目指す生徒が学ぶ2年制の教育課程¹⁶⁾」)となる。日本の高校にあたる。現在、セカンダリー卒業生の7割以上がこの教育を受けている。
- ④ 小学校からシックス・フォームの段階で、これらの公営学校とは別に、伝統的なパブリック・スクールを中心とする私立学校に全生徒の7%、55,000人が在籍する。
- ⑤ 大学はAレベルテストの結果によって入学配分される。個別大学の試験は基本的にはなく(面接がある場合はある。)、大学は3年間で、スコットランドは4年間である。
- ⑥ 小学校から大学までみると、5歳で小学校に入学し、21歳で卒業となる。
- ⑦ 公立学校は原則として無料だが、私立学校は年間数千~1万ポンドの学費がかかる¹⁷⁾。」

イギリスにおける教育問題

○教育格差

- ① 第二次世界大戦前は、上流階級には古典教育など中心とするエリートを育成する教育を、労働者層には、職業教育などの実学を重視するという教育観が根強く残っていた。戦後になって、教育改革の目標として階級格差の解消が掲げられたが、い

¹⁵⁾佐貫 浩 2002 『イギリスの教育改革と日本』(高文研)p.3

¹⁶⁾小林 章夫 2005 『教育とは イギリスの学校から学ぶ』(NTT 出版)p.26

¹⁷⁾佐貫 浩 2002 『イギリスの教育改革と日本』(高文研)p.3

まだに階級的な分断が根強く残り、上記のような 19 世紀的な教育観が強く存在する。例えば、「イギリスでは、上層中産階級は伝統的にエリート私立教育を利用することによって、大多数の国民が通学する教育機関を「自己排除」してきたという歴史があり、それは、現在も脈々と受け継がれている¹⁸。」

- ② 地域間での経済格差が大きく、親の経済力の差が子供の教育格差へとつながっている。「また、貧困地域においては、経済的な格差だけでなく、親の子どもの教育に対する関心、子どもの家庭学習を支援できるような親の基礎学力の低さなど、いわゆる家庭における文化的貧困の問題も課題とされている。例えば、ロンドン中心部は、地域により居住する民族や社会的階層が異なるため、貧困かつ教育に関心が低い層が居住する地域では、公立学校の教育は多くの困難を抱えている¹⁹。」その教育格差は、私立校と公立校の間の格差のみならず、公立校間にまで広がっている。
- ③ 「親に学校の選択権」があり、それが学校間の格差をひろげた。学校間の格差は評判や試験結果、社会階層や人種・民族構成など多岐に及ぶ。「親に学校の選択権」は、教育困難地域、あるいは、教育困難校からの一定の経済力を持つ家庭の脱出の手段となっている²⁰。」

○教育水準の低下

- ① 「リテラシー（読み書き理解能力）水準は先進 8 ヶ国の下から 3 番目に位置する²¹。」
- ② 「小学校からセカンダリー・スクールに進学した生徒の 40%がその 1 年で入学時よりも、低い読み書きと計算の能力レベルになっている²²。」
- ③ イギリスは他の先進諸国に比べて数学学力が低下している。「(国際教育到達度評価学会(IEA)による国際数学・理科教育調査(TIMMS)において、39ヶ国中23位)²³」

イギリスにおける教育政策

○教育格差に関して

- ① 底辺層に位置する子供たちの学力向上が大きな目標として掲げられ、その一環として、リテラシーの向上に力を入れている。
- ② 底辺層の人々の雇用改善と教育訓練を直結して考え、その押し上げを強く進めようとしている。
- ③ 異なる国籍・宗教・人種的アイデンティティを尊重することを奨励し、民主主義・

¹⁸吉田 多美子 2005 『イギリス教育改革の変遷』(レファレンス 平成 17 年 11 月号)p.111

¹⁹吉田 多美子 2007 『フィンランド及びイギリスにおける義務教育の評価制度の比較』(レファレンス 平成 19 年5月号)p.105

²⁰佐貫 浩 2002 『イギリスの教育改革と日本』(高文研)p.89

²¹嶋田真智恵 1999 『イギリスのリテラシー向上への取組み』(カレントアウェアネスポータル(国立図書館サイト):<http://current.ndl.go.jp/ca1241>)

²²佐貫 浩 2002 『イギリスの教育改革と日本』(高文研)p.32

²³吉田 多美子 2005 『イギリス教育改革の変遷』(レファレンス 平成 17 年 11 月号)p.101

人権・他民族・多文化共生などを教えるシチズンシップ教育の推進を図っている。

○リテラシー（読み書き理解する力）向上活動

1998年度からすべての初等学校で読み書き能力を向上させるための「リテラシー・アワー」を義務化した。「リテラシー・アワー」は、毎週6～7時間、月曜から金曜日まで毎日各1時間程度が当てられている。内容は学校ごとに異なるが、生徒全員で読み取りと書き取りをし、ストーリーをつくって、全体で話し合うという形式で行われる。

○その他具体的政策

- ① 全国共通カリキュラムを公表し、英語、数学の強化。初等学校での外国語の奨励。
- ② 政府が目標とする教育水準向上の具体的目標値を設定し公表。
- ③ 教育水準を引き上げるために、教育困難校の名前を公表。
- ④ 教育困難校をより速やかにフレッシュスタート（新しいスタッフと経営理念での再出発）させたり、閉校させた。また、問題のある教師を以前より簡単に解雇した。
- ⑤ 教員養成課程へのさらなる全国共通カリキュラムの導入。正教員資格授与に先立つすべての教職課程学生に対して数学、英語、情報処理技術の統一テストを導入。
- ⑥ 教育、訓練、奉仕活動、仕事のいずれかに就くことを意図的に拒否する16～18歳には失業給付を減額する雇用政策ニューディールプログラムの開始²⁴。」
- ⑦ 「初等学校における低学年30人学級を実現²⁵。」
- ⑧ 公営学校に大幅な財政権を付与。この財政権の配分の一番大きな部分は生徒数によって決定される。このため、学校が保護者の選択にそぐわず生徒数が減少していくと、学校の責任でスタッフの削減をしなければならない。よって、学校が保護者により選ばなければならないという意味で、学校間での競争原理が働くようになった。

視察報告

ロンドン リッチモンド・アポン・テムズ区役所訪問

2月1日（月）寒風の朝、財団法人自治体国際化協会ロンドン事務所（CLAIR）の引場参事役、木村氏の案内で、バスで約30分のロンドン近郊都市リッチモンド・アポン・テムズ区役所へと向かう。日本の事務的な区役所のイメージとは違い、静かな街に似合って歴史を感じさせる、こぢんまりしたたたずまいの建物である。



リッチモンド・アポン・テムズ区役所

²⁴岡本 徹 2006 『イギリス新労働党の教育政策』（広島修大論集 第47 巻 第1号(人文))p.94

²⁵吉田 多美子 2005 『イギリス教育改革の変遷』（レファレンス 平成 17 年 11 月号)p.101

リーダー議員のサージ・ローリー議長 (Cllr Serge Lourie, Leader of the Council) はじめ8名の議員他に暖かく迎えられた。自己紹介の後、3ヶ月前に日本を訪問されたばかりのリーダー議員から、リッチモンド自治区の概要説明を受け、議員が行政職長(内閣構成議員)を兼務するイギリスの地方自治体組織や4年に1度の選挙など懇談した。

リッチモンド自治区の概要説明



・区内中心部をテムズ川が蛇行して流れ、ロンドンから河下りもできる。古くから王族をはじめ有名人が別荘を構えてきたことから歴史的遺産が多くあり、教育的レベルや環境への意識が高い地域。市民とともに川や街の清掃活動を行っている。

リーダー議員 Cllr Serge Lourie, Leader of the Council を囲んで

- ・人口 800 万を擁するロンドン市 33 の区の 1 つで、人口 19 万人
- ・議員はカウンセラーと呼ばれ、4年に1度の選挙で 54 名が選出される。
- ・議員の中から 9 名のキャビネット (内閣構成議員) を任命し、他の議員はそれを監視するという政党政治組織となっている。

以下は、懇談参加議員と専門部所長である。

リーダー議員 (Cllr Serge Lourie, Leader of the Council)

副リーダー議員 (Cllr Stephen knight, Deputy Leader)

環境担当内閣構成議員 (Cllr Geoff Acton, Cabinet Member for Environment)

子ども・教育担当内閣構成議員 (Cllr Malcolm Eady, Cabinet Membar for Children's Services and Education)

成人行政担当内閣構成議員 (Cllr Denise Carr, Cabinet Member for Adult Services)

業績向上担当内閣構成議員 (Cllr Jane Dodds, Cabinet Member for Performance)

青少年・文化レジャー担当内閣構成議員 (Cllr Liz Jaeger, Cabinet Membar for Youth, Culture & Leisure)

運輸交通担当内閣構成議員 (Cllr David Trigg, Cabinet Membar for Traffic, Transport and Parking)

議員・規制委員会委員長 (Cllr Eleanor Stanier, Chair Regulatory Committee)

議員・財務・成果委員会委員長 (Cllr Sue Jones, Chair Finance and Performance Committee)

議員・計画委員会委員長 (Cllr Brian Miller, Chair of Planning Committee)
事務総長 (Gillian Norton, Chief Executive)
首席取引基準官 (Bruce Ironmonger, Principal Trading Standards Officer)
ほか 子ども・教育部長 校長 教員 美術館員 観光・マーケティング課長など

リッチモンド区公立セカンダリースクール「Orleans Park School」訪問



授業風景

区の概要説明を受けた後リーダー議員の案内により徒歩 10 分ほどで目的の学校へ到着。静かな学習環境に恵まれた様子の学校で、早速 Jo Longhurst, Headteacher, Orleans Park School 校長と Hirary Ewell, Lead EAL Teacher (Japanese speaker) 教員より学校概要説明を受けた。

- ・リッチモンド区に 8 カ所あるセカンダリースクールの 1 つで、日本の中・高等学校に位置づけられている。様々な能力のある 11 歳から 16 歳まで 1,000 名の生徒が在籍し、内男子 60%、女子 40% の割合である。先生はパートタイマーを含め 74.5 人である。スペシャルニーズの生徒もいて、保護を必要とする生徒や少数民族出身生徒へのアドバイザー (Velia Hartland, Adviser for Vulnerable Pupils & Ethnic Minority Achievement) の紹介があった。
- ・学校として誇りとしている素晴らしい教育システムをとっていて、何でも前向きに対応している学校という評判を地域から受けている。
- ・それぞれの生徒のニーズに適したカリキュラムを作成している。
- ・放課後のクラブ活動も幅広く、盛んに行っている。総じて外国語教育に熱心。日本語クラブがあり、日本人の先生が指導している。生徒の海外留学活動に積極的に取り組んでいる。

スペシャリストスクール指定校の説明

次に Rosina Crisa, Director of Specialism さんより、当学校は数学とコンピューター、言語に関して特に高度な教育を施すことができるという指定を受けている事に関する説明があった。特にインターアクティブな授業を行うためホワイトボードが広範囲に使用され、先生方の工夫により授業に重要かつ大きな役割を果たしていると強調していた。続いて 3 年間日本に滞在し英語を教えた経験がある英語の教師サム ナイト先生から、日本語での挨拶をいただき、いつもクラスで行う電子システムによるホワイトボ

ードを使用した授業方法の紹介があった。

例えば、スペリングや言語・外来語の起源などの勉強では生徒が画面に触れて正答を導き出せること。シェークスピアの授業では戯曲の解説のみでなくパフォーマンスとして分析し、さらに演技もするので、ペーパーに書く勉強に加えて表現する能力も身につくとのこと。私たちも「やってみませんか」と誘われ、出された問題の回答を画面にタッチするなど、久しぶりに生徒の気分を味わった。



電子システムによる
ホワイトボードを使用した授業

日本語を学ぶ生徒の案内で構内見学



生徒のみなさんと

この間、部屋の後部に参加していた日本語クラブの生徒さん数名が紹介され、3グループに分かれてクラスルームやスポーツ施設など構内と、歴史と良い環境に恵まれた学校を見学した。すでに私たちを案内する準備が十分されており、クラブのリーダーを中心に構内案内資料を持ち、日本のマンガやアニメに関心があり留学を希望していることなど、私たちの質問にも、流暢な日本語で丁寧に答えてくれた。教室でのパフォーマンスもあった。

視察団の事前提出質問への回答

再度会議室に戻り、視察団が訪問目的とする教育に関して質問書を提出しており、その回答と説明を受けた。イギリスの教育については本章の始めに掲示したので、リッチモンド校に関するもののみ記す。

Q-1. 生徒数によって配分されるという予算について、それに伴う問題点について

A 基本は1人につき3,000ポンド(円換算約432,000円)の資金が出るが、他に特別な資金提供制度がある。例えばスペシャリストスクール指定校である。本校は先ほどご紹介した言語や数学に関して特別教育を行っている。また様々なプロジェクトや問題を抱える学校などが対象となる。一方学校独自の収入も認められており、本校は教室や体育館など施設の貸し出しをしている。

Q-2. 全国学力テストや学校評価 成績一覧表の公表について

A 全国学力テストの試験の結果、全国的にA~Cまでの数で学校が評価される。但

し「生徒達が社会的背景をもって生まれてきたか」など考慮され、公平に裁定を受けており、本校は高く評価されている。学校としてターゲットの設定や、成績をチェックするため学校独自のシステムがある。(公表については無)

Q-3. 学校自治、理事会（ガバナー）方式について、および地方教育局（LEA）とのかわりについて

A どの学校も理事会があり理事を中心に運営している。LEA にはインクルーブメントパートナー制度があり、1学期に1回来校し地方教育局に報告される。また外部からのチェック制度があり3～5年に1回検査官による査察がある。評価の悪い学校には毎年入るという状況であるが、当校はターゲットをもち、学校自己評価を行っているので、最少の5年に1回と優良校である。

Q-4. 親の学校選択及び地域とのかわりについて

A 基本的には親が自治体に申し込み、自治体が学校を決めるが、それには優先される項目がある。①スペシャルニーズ ②兄弟が在校生 ③連携するプライマリースクール（小学校）④通学距離などである。親が直接選ぶ事も出来る。当校では昨年200名募集のところ900名の応募があった。



ソウルバンド演奏の様子

最後に案内されたのは生徒によるソウルバンドの演奏会であった。少しはにかみながらの演奏であったが、校長や先生方も一緒にリズムをとりながらの鑑賞は、イギリスの学校の雰囲気味わえて、初視察先での楽しいひとときとなった。

学校訪問後、リッチモンド区の方々と昼食をご一緒し、にぎやかな交流となった。そこには、名古屋で開催予定の”エコ10”出展を目指して、流木を材料にした椅子の作品が数点置かれ、支援している日本女性から熱のこもったプレゼンテーションを受けた。また、神戸に留学した経験のある、英語の不自由な生徒支援をしている先生から、日本の思い出や今後の交流事業の可能性について話があった。

最後に視察団ひとりひとりに、学校視察終了後、生徒の手作りジャムとクッキーをお土産にいただいた。日中でも雲が低く寒い風の中、皆様から見送りをうけ暖かい思いを胸にヒースロー空港へ向かった。

HARROU SCHOOL ハロウスクール訪問

イギリス屈指の名門パブリックスクール。「1572年エリザベス一世の勅許を受けて創立され438年の歴史を有する。全寮制で13歳から18歳までの男子800名が学ぶ。

ハロウ校の教育方針は、「人生への訓練」を基本とし、独立心、協調性、責任感と義務感、リーダーシップの育成、マナーや努力、そして正しい職業倫理観を身につけさせることである。それぞれの生徒が自ら選んだ職業の頂点に到達するために必要とされる技術と姿勢を身につけて卒業させることを目標としている。結果国内はじめ世界の一流大学へ生徒を送っており、その後の活躍は多くの卒業生が証明している。

ハロウ校のカリキュラムでは、午前中に授業を、午後はクラブ活動や興味のある活動に取り組む。40分授業が週38コマ。週3回は午後4時半から7時までの授業もある。教師と生徒の割合は1対8.5人で、1クラスも平均14人の少人数である。授業では、1人ひとりに意見を言わせ、各人にあった宿題を出すなど、それぞれの生徒の興味や気質、能力に合わせた、多方面にわたる全人教育を目指している。



グラウンドを望む

ハロウ校は完全な全寮制の学校である。11のハウス（寮）があり、それぞれのハウスが独自の雰囲気、伝統を持ちながら、学校全体の運営方針と調和して機能している。教科の学習だけでなく、スポーツや芸術など、自分が関心のあることを徹底的に学ぶ機会を与えている。ハウスは課外活動を行う単位でもあり、それらを通じて、生徒は個々が持つべき大切な価値観や判断の尺度を身につけるのである²⁶。」

ロンドンのホテルを出発し、多民族が混じる街並みや暮らしぶりを見ながら約1時間で私立全寮制ハロウ校に到着。訪問日は無理をお願いして日曜朝、道いっばいに教会から退出した正装の男子生徒が現れ、イギリスの地に来ていることを印象づけられた。校長先生訪問の約束時間は10時45分、礼拝終了後の大切な1時間をいただいた。



日曜日の風景

²⁶ ハロウサマースクール日本事務局発行のパンフレットから概要紹介

Mr. Barnady Lenon ハロウ校校長と面談

～世界のリーダーを養成するのがこの学校の目的である。～

校長は、長身を黒の正装に身を包んだ端正で誇り高い風貌の方で、挨拶の後、視察団の質問に答える形で面談が進んだ。

Q 優秀な生徒が集まっていると思われるが、学力重視についての見解は

A この学校は全寮制でその見方は間違っている。カリキュラム作成では重要な2点として1つは学力、もう1つは音楽・スポーツ・芸術面に力を入れている。生徒もこの両面の分野で秀でている人を歓迎している。本校は社会をリードする人、リーダーを育成することが務めと考えている。

Q リーダーとなるための人格形成について

A トータルな人間育成の方法としては、24時間全ての責任を学校が担っていること。生徒に様々な機会の提供と、チームとして協力ができるよう育成することに務めている。

Q リーダーは社会的責任と個人の利益との相克から孤独になる場合の指導について

A まず学校の中で本当のリーダーシップを学ぶこと。小さなグループでもリーダーとしての責任と誇りを持てるよう育成している。ボーディングハウスでは1年生は小さな義務を課される。2年生は1年生のケアを、4年生はあらゆる人への責任を、5年生は学校全体を、と段階を追って学ぶ。

一番大事なのは自分の学年の中で責任ある行動が取れるか、友人に好まれない選択を決断できるかであり、それを先生がサポートしている。

Q 現在校長先生が重要と考えていることについて

A リーダー育成が主要目的ではない。他に3つの目標がある。①最高の大学で学ぶための支援。②生きていく上で必要な基本的事項、発言や書く能力を高めること、イニシアチブをとれる人間、チームで働ける人間を育てること。③正しい振る舞いをする生徒を育てること。そのため本校の教師陣は様々な能力をフルに活用して働いている。全ての教師は専門の学科の他に1日2時間は学科外の活動が求められ、授業と同様年間の予定リストを表示している。

Q 1クラスは何人であるか

A 13歳は20人、17歳から12人である。

Q 校長発言「正しい振る舞いをする生徒を育てる」について詳しく教えてほしい

A 10代の男子生徒の学校であるので、邪悪なことをしない礼儀正しい人であること



ハロウ校校長と

ということである。たとえば、タバコ・アルコール・繁華街に行くこと・いじめなどはしないこと等である。

Q 理想や理念は素晴らしいが、ついていけない子はいないか

A イギリスでは20%の若者が「なまけもの」となっている。それに対応するには興味深い教え方ができる先生を育成しなければならない。ベストティーチャーは鋼鉄な心を持ち、親切だが厳しく、高い希望「生徒はできる！」と子どもの能力を信じる先生でなければならない。反応がない生徒、苦手なことを克服できない生徒へのアドバイスに努めており、保護者から感謝されている。

イギリスの公立学校では11~16歳の20%が学ばずに卒業し、読み書きできずに職が得られない。さらに期待度が低い一生失業者の生活がついてまわる。こうした20%のボトム生徒を中位に引き上げることが国の大きな課題となっている。

Q 政治的な教育課題について伺いたい

A イギリスでは左派の考えは、政府が指導体制をとるべきで、地方自治体を通じて学校運営をさせる。右派は、学校は中央政府や地方自治体から独立したものであるべきとしている。保守党は、お金は直接学校に行くべきと考えている。5月には政権が変わり財政的に自由になるであろう。

Q ハロウ校の財政状況を教えてほしい

A 1年間の授業料は約28,000ポンド(円換算約4,032,000円)で、親が払っている。費用は先生の報酬と寮の生活費が半分づつである。財政は全額自力でまかなっている。国の法的ルールは守っているが、教育に関する指導は受けていない。

校長からイギリスの政治動向や都議会へのご意見も含め、歴史あるハロウ校リーダーとしての話をそれぞれの団員が受け止めた。5月6日の選挙の結果が大変興味あるものとなった。校長に感謝を述べ退室した。

ハウスマスターと家族と共に同居し、70人の寮生に家庭的雰囲気の中で接している1790年に建てられた一番古い学寮(ハウス)を訪ねた。まず概要の説明があった。当時は建物もなにもなく、初代のマスターが自分の子どものために作ったものである。1948年以降現在のように運用され、詩人バイロンはじめ世界的に活躍する多くの卒業生を輩出している。親の1/3は世界各地に居住。日本人在校生は5名。寮生は13~18歳まで各学年12~14名いる。本日は寮生で日本人生徒の太郎さんとダンさんが案内役となった。二人の心境や家族や友人との交流、将来の夢など会話を挟みながら寮内を見学した。責任感と尊厳ある風貌の歴代ヘッドマスターの写真が飾られ、部屋中いっぱい名前が刻まれている。多くの卒業生が学んだ痕跡が重厚な雰囲気を作り出している。



ハウスの内部（出身者の名前が刻んである。）

中学生に当たる3年間は2人部屋で、みんなが友達に慣れるよう4週に1回部屋替えがある。一人部屋や図書室、娯楽室など見学し、永年世話されている高齢の寮母さんも紹介された。多感な10代の男子生徒が共に暮らす、厳しいルールの中で生活することをハウス全体で続けてきたその意義を理解することができた。

次に、ハロウ校サマーコース責任者 Mr. Harry Ogden 氏のご案内でスクールツアーに出た。挨拶の後、氏が担当する「ハロウサマースクール」は、日本の生徒から始まったという説明を聞いた。毎年7～8月に2～3週間、インターナショナルスチューデントのため夏期英語研修を主催している。毎年200～300名の日本生徒を受け入れているとのこと。サマースクールの縁でスポーツ交流など日本へも何度か訪問していて、大変丁寧に親しく案内していただいた。



オールドスクール



スクールツアー

まず最初に訪れたのは「オールドスクール」。1615年に建てられ勉強が始められた場所、現在も校長先生が新入生に最初に学校の歴史について講義する伝統が受け継がれ、歴史の授業やアートギャラリーとして常時使用している。映画ハリーポッター「賢者の石」の撮影に使われたと聞きながら中に入る。広い1部屋に当時から使用されていた幅の細いベンチがいくつもあり、入り口を除く3方に教壇が置かれている。チャーチル卿、バイロン卿など壁には大小のここで学んだ生徒の名が刻まれ、石盤で勉強した複式の授業風景が目につく。

千年を経てハロウの丘の頂きにある聖メアリー教会、その丘の上からぐるりと見渡せば遙か向こうに芝生の運動場、赤い煉瓦屋根の400人収容できるシアター、図書館、芸

術やスポーツの活動施設があり、生徒の彫刻作品に出会える。湖、乳牛 80 頭を飼っている牧場、農場、障害乗馬場、9 ホールのゴルフコース、12 のサッカー場やテニス場があり、イギリスの古典も含めほとんどのスポーツ競技ができる施設が整備され、オリンピックの練習会場として提供予定とのこと。

道の両側には、学科ごとに別に作られている校舎や、マスターと呼ばれる先生のための住まいなどがあり、広大な敷地はサッカー場が 300 ほど取れる広さと聞き、羨ましさを超え、ため息が出た。

第 1 次・第 2 次大戦で亡くなられた卒業生を祀る建物では、戦死した子のために記念に建てた部屋や、チャーチル卿はじめ 7 人の歴代イギリス首相、国際留学生として迎え、卒後有名となった、ネルー首相、フセイン国王などの政治家や実業家の写真を拝見した。

800 名の生徒と 95 人の教師全員を収容できる「スピーチルーム」は、パイプオルガンも置かれ、毎月曜日朝の校長講話のほか、コンサート、シェイクスピア劇の上演など様々な形で利用され、休暇中は一般に貸し出しがされている。



スピーチルーム



大食堂のビュッフェ

生徒は 1 年生 160 人で、8 クラスに別れ 1 クラス 20 人である。1 年目は全員同じ教科を学び、2 年目からは自分で教科を選択できる。選択の幅は広く用意され、そのためさらに少人数クラスとなる。

年間の授業料の他、特別行事は別料金。課外活動も積極的で、今年はグループツアーでキリマンジャロ登山や、タンザニアに学校を建てるなど第 3 世界を支援するプロジェクトに参加する生徒がいる。スポーツツアーでは日本との交流が盛んで、年に 6 回ほどラグビーやサッカーなどの対抗試合がある。

最後の訪問は生徒全員が利用する大食堂で、生徒と同じランチをとった。ハウスを案内してくれた太郎さん、ダンさんに加え科学の勉強をしている生徒も一緒にテーブルで、将来の夢や両親の期待感、学校の感想、休暇の使い方など英語混じりの会話で楽しい時間となった。ゆたかな恵まれた環境で学ぶことのできたハロウ校の生徒が、これからの世界を平和で平等に暮らせる社会にリードしてくれると信じ、学校を後にした。

(文責 馬場 裕子)